

## 大学ハンドボール界における戦後の国際交流の再開

### Post-war resumption of international exchanges among college handball clubs

高峰 修\*, 田原 淳子\*\*

Osamu TAKAMINE\* and Junko TAHARA\*\*

#### I. はじめに

本稿では、日本のスポーツ界が戦後、国際スポーツ界に復帰していく経緯について明らかにするために、大学スポーツに着目する。戦前から戦後直後にかけての日本では、スポーツの担い手の中心は学生だったといえる。多くのスポーツは大学の体育会運動部において学生によって行われ、普及と同時に強化も進められてきた。本稿では、そうした役割を果たしてきた大学スポーツにおいて、戦後の国際交流がいつ頃からどのようにして再開したのかを明らかにする。

本プロジェクトにおけるこれまでの調査から、第二次世界大戦前後の日本の競技団体における国際交流の状況については、以下の点が明らかになっている。

- 1) 戦前にオリンピック競技大会に参加していたものの戦後の大会に不参加であった競技は、いずれも球技であった。戦後の経済難から選手数の多い団体競技の参加が困難であったと思われる。
- 2) 戦前は不参加でありながら、戦後早期にオリンピック競技大会への参加を果たした競技は、いずれも個人競技であり、かつ第1回アジア

競技大会（1951年、ニューデリー）に出場した競技や戦後早くからアメリカとの交流を行っていた競技であった。

- 3) オリンピック競技大会への参加は、国内競技連盟（NF）が当該国際競技連盟（IF）に加盟していることが前提になるが、戦後、いち早くIFへの再加盟を果たしたレスリングや水泳では、アメリカ本土との組織的な交流を行っていた。
- 4) 旧同盟国であったドイツとの関係としては、ハンドボールにおいて戦前の交流が盛んに行われていた。

これらの結果を踏まえ、本稿では数多くの競技の中からハンドボールを取り上げ、各大学体育会ハンドボール部が、いつ頃からどのような国際交流を再開したのかについて明らかにする。

#### II. 研究方法

各大学ハンドボール部の戦後における活動状況を把握するために、各部やOB会が発行した部誌・記念誌等を参照し情報を収集した。具体的には1945年から1965年にかけての活動に関する記述、ならびに同時期の年表から、国際的な活動に関す

\* 明治大学政治経済学部 (School of Political Science and Economics, Meiji University)

\*\* 国士舘大学体育学部 (Faculty of Physical Education, Kokushikan University)

る情報を集めた。対象とした大学は、当時、関東でリーグを組んでいた私立6大学（慶応、中央、法政、明治、立教、早稲田）であるが、そのうち慶応、明治、立教、早稲田各大学のハンドボール部についての情報を収集することができた。

### Ⅲ. 結 果

#### 1. 日本におけるハンドボールの普及と強化

日本におけるハンドボールの統括団体の設立は1938年のことである。その2年前、1936年にはドイツのベルリンにてオリンピック大会が開催されたが、サッカーと並んでドイツで人気があったハンドボールがこの大会で初めて競技として採用された。また1936年に開かれたIOC総会では1940年の大会を東京で開催することが決定した（結果的には開催返上、中止）。こうして東京大会でのハンドボール競技に選手を出場させる必要が生じ、急遽、国内におけるハンドボールの普及とそのための体制づくりが進められた<sup>2)</sup>。

表1に示したように、日本ハンドボール協会（当時は日本送球協会）が発足したのは1938年2月のことである。今回の調査の対象となった4大学ハンドボール部のうち設立が最も早いのは慶応大学（1937年9月、当時の名称は“送球倶楽部”）であり、これは日本ハンドボール協会の発足に先んじている。日本ハンドボール協会発足の2ヶ月後に早稲田大学で設立、1941年に明治大学が続く。立教大学ハンドボール部については1946年に「体操部より独立し送球部として承認」<sup>3)</sup>と記されていたが、1944年にドイツチームと交流戦を行ったという記述もみられ、ハンドボールを行う集団は部の正式な創立以前にも存在していたようである（注1）。

本稿の目的は戦後の大学ハンドボール界の国際交流の変遷を追うことにあるが、ここで戦時中の状況について確認しておく、慶応大学では1942年に「訪日ドイツ艦隊」チームと、1943年に「枢軸国交換球技大会」として、それぞれ国際

親善試合が行われた<sup>2)</sup>。また上述のように、立教大学は1944年に「ドイツチーム」とハンドボールの交流戦を行っている。

#### 2. 戦後における国際交流の再開

オリンピック大会にせよ世界選手権大会にせよ、ある国のナショナルチームが国際競技会に出場するためには国際競技連盟（IF）に加盟している必要がある。日本ハンドボール協会の国際ハンドボール連盟（IHF）への加盟が承認されたのは、戦後7年経った1952年のことである。ちなみにハンドボールの国際統括団体としては国際アマチュアハンドボール連盟（IAHF）が1928年に設立され、オリンピックベルリン大会におけるハンドボール競技はIAHFの管轄のもとで実施された。しかし戦後の1946年にはIHFが設立され、日本ハンドボール連盟はIHFの加盟団体となった。

関東にある4大学ハンドボール部の部誌・記念誌から情報を収集する限りでは、日本の大学ハンドボール界が戦後に海外のチームと親善試合等の交流をもったのは、戦後11年経った1956年のことである。この年、西ドイツナショナルチーム（注2）が9月に来日し、横浜や八幡、甲府など全国各地にて国際親善試合が行われた。その試合相手として全日本選抜、日本学生選抜、九州選抜、関東学生連合等のチームが生まれ、全日本選抜2試合、日本学生選抜2試合、その他各地域の選抜チームが4カ所で各1試合、計8試合が行われた。学生選抜チームのメンバーは計20名であり、その内訳は日本体育大学7名、芝浦工業大学5名、立教・明大・慶応各大学から2名、早稲田大学と教育大（現筑波大学）から各1名であった<sup>1)</sup>。日本学生選抜の試合結果は惨敗であり、技術、パワーの両面においてレベルの差を実感したようである。「早稲田大学ハンドボール部五十年史」には以下のような記述がある。

「プレーの方の特徴は、なんと言っても、手が大きく、指が長いので、球をまるで日本人が

表1 東京4大学ハンドボール部の戦前から戦後20年にかけての歴史

西暦	昭和	明治	立教	早稲田	慶応	関東学生連盟・リーグ	
1936	11	オリンピックベルリン大会にてハンドボールが初めて採用される					
1937	12				9月「慶応義塾送球倶楽部」発足		
1938	13	2月 日本送球協会発足					
		「明大バスケット部」が出場		4月 「送球倶楽部」創立		春期:東京学生リーグ1部制 秋期:東京学生リーグ1部制	
1939	14					春期:東京学生リーグ1部制 秋期:不明	
1940	15	オリンピック東京大会(中止)					不明
1941	16	4月 「体育会送球部」創部		↑ 太平洋戦争 ↓		春期:東京学生リーグ1部制 秋期:東京学生リーグ1部制	
1942	17				国際親善試合 対訪日ドイツ艦隊(東京、4名)	春期:東京学生リーグ1部制 秋期:不明	
1943	18				国際親善試合 枢軸国交換球技大会(東京、2名)	不明	
1944	19		対ドイツチーム(横浜、東伏見)			不明	
1945	20					春期:中止 秋期:再開したものの詳細は不明	
1946	21		体操部より独立し「送球部」として承認				春期:関東学連1部制 秋期:関東学連1部制
1947	22						春期:関東学連1部制 秋期:関東学連2部制
1948	23						春期:関東学連2部制 秋期:関東学連1部制
1949	24						春期:関東学連1部制 秋期:関東学連1部制
1950	25						春期:関東学連1部制 秋期:関東学連1部制
1951	26					春期:関東学連1部制 秋期:関東学連1部制	
1952	27	日本ハンドボール協会の国際ハンドボール連盟への加盟が承認される					春期:関東学連1部制 秋期:関東学連1部制
1953	28					春期:関東学連1部制 秋期:関東学連1部制	
1954	29	関東学生ハンドボール連盟が分裂、6大学リーグ結成(立教、法政、早稲田、慶応、明治、東京教育)					春期:東京6大学リーグ 秋期:東京6大学リーグ
1955	30	秋期より連盟が一本化し関東学連1・2部制					春期:東京6大学リーグ 秋期:関東学連2部制
1956	31	再び分裂し、秋期より東京都学連5大学リーグ(立教、法政、早稲田、慶応、明治)					春期:関東学連2部制 秋期:東京5大学リーグ
			国際親善試合 対西ドイツナショナルチーム				
		選出(人数不明)	3名選出(横浜・甲府)	1名選出(横浜・甲府)	2名選出(横浜・八幡・甲府)		
1957	32					春期:東京5大学リーグ 秋期:東京5大学リーグ	
1958	33	秋期より再度学生連盟が一本化し、関東学連2部制に					春期:東京5大学リーグ 秋期:関東学連2部制
1959	34					春期:関東学連2部制 秋期:関東学連2部制	
1960	35	国際親善試合 対ルーマニアナショナルチーム					春期:関東学連2部制 秋期:関東学連2部制
		(記載なし)	(記載なし)	全早稲田(横浜)	3名選出(横浜)		
1961	36					春期:関東学連2部制 秋期:関東学連2部制	
1962	37	世界学生選手権大会日本代表(スウェーデン)					春期:関東学連2部制 秋期:関東学連2部制
			4名選出		1名選出		
11人制から7人制に移行							
1963	38	第5回7人制世界選手権大会日本代表(チェコ)					春期:関東学連2部制 秋期:関東学連2部制
		(記載なし)	1名選出	(記載なし)	(記載なし)		
1964	39					春期:関東学連2部制 秋期:関東学連2部制	
1965	40					春期:関東学連2部制 秋期:関東学連2部制	

ソフトボールを握るような感じで、片手で操るように処理をする。したがって、パスにしても、シュートにしても、思うところへ自由自在に投

げているという印象を受けた」(p94)

さらには、試合後のレセプションにおけるドイ

ツ選手との社交性の違いを、当時の日本の大学生たちは痛感させられたようである。

「甲府のぶどう園で行なわれたパーティ（レセプション）の会場では、全く恥かしい想いをさせられた。ゲームに大勝した西独チームの選手たちは、揃いも揃って、陽気に振舞っていた。甲府産のワインを何杯も飲み干しながら、日本チームの面々に、話しかけて来た。当時、学生のわれわれにとって、今のように、外国人との親善パーティの経験などなく、まさに『丘に上ったカップ』であった。それだけに、陽気なドイツ人の社交ぶりが極めて印象的だった。」  
(p95、すべて原文ママ)

日本の大学ハンドボルの戦後国際交流は、第二次世界大戦を同盟国として戦ったドイツ選手たちとのこうした経験から始まったのである。

この4年後の1960年6月にはルーマニア<sup>(注2)</sup>のナショナルチームが来日し、国内で計10試合が行なわれた。その一試合目が6月12日に小石川球技場で行なわれた全早稲田との試合である。結果はやはり大敗(4-19)であった<sup>1)</sup>。またルーマニアとは学生選抜チームも試合をしたようであり、そのチームに慶応から3名の学生が選出されている。

公益財団法人日本ハンドボール協会ホームページ上の情報によれば、翌1961年3月には全日本男子チームが第4回世界選手権大会(7人制)に初めて出場しているが、4大学からこの全日本男子チームに選抜されたという記録は見つからない。

翌1962年には世界学生選手権大会がスウェーデンで開催され、その日本代表チームに立教大学から4名、早稲田大学から1名が選ばれている。

さらに翌年の1963年にチェコで開催された第5回世界選手権大会(7人制)の日本代表チームに、立教大学から1名が選出された。

### 3. 学生ハンドボールにおける国際交流再開の背景

以上のように、日本の大学ハンドボール界が戦

後に国際交流を再開するのは戦後11年経った1956年のことであり、その相手は西ドイツであった。この11年間という歳月は、学生スポーツにおける戦後の国際交流再開においては必ずしも短いものではなかったであろう。大学ハンドボールにおいて国際交流の再開に11年を要した背景には、次のような理由があると思われる。

第一に、関東の学生ハンドボールを統轄する団体が分裂と合併を繰り返したことがある。表1からわかるように、まず1954年に関東学生ハンドボール連盟から東京6大学リーグが分裂した。その翌年の1955年秋に両団体は合併し、関東学連のリーグ戦が二部制で行なわれた。しかしその翌年の秋には再度、関東学連から東京5大学リーグが分裂するも、2年後の1958年秋には再び合併し、その後は関東学連の二部制が続くことになる。

こうした団体の分裂や合併の経緯や理由については各部の部誌・記念誌から確認することはできなかったが、統括組織団体の安定した運営が行なわれていない状況は、少なくとも国際交流の再開や国際競技会への復帰を積極的に推し進めることにはつながらなかったと推察される。

もう一つの理由として、ハンドボルの国際競技団体による主導権争いの問題があるだろう。国際ハンドボール連盟(IHF)が設立されたのは戦後の1946年のことであるが、ハンドボルの国際統括団体としてはもう一つ、1928年に設立された国際アマチュアハンドボール連盟(IAHF)があった。これら両団体間には国際ルールをめぐる主導権争いが生じていたようであり、このことも終戦後すぐに国際競技会の整備を進められなかった要因としてあるだろう。

## IV. おわりに

4大学ハンドボール部の部誌・記念誌を資料とした本稿において、大学ハンドボールにおける国際交流再開には戦後11年の歳月を要したことが明らかになった。11年という期間は他の競技の

戦後国際交流の再開と比べて必ずしも短いものではないと思われ、つまりハンドボール、特に学生のハンドボールが他の競技に先駆けて日本スポーツ界の国際交流の再開あるいは国際競技会への復帰を導いたわけではないと判断できる。

しかし、この背景には日本以外のハンドボール界をめぐる諸事情や力学も関わっていそうである。先にふれた国際統括団体の主導権争いに加え、ハンドボールという競技自体がドイツにおいてサッカーと並んで人気があったこと、戦後の世界のハンドボール界においてドイツやルーマニアといった旧枢軸国が強豪であったことも関わっていそうである。さらには、7人制と11人制といったルールの問題も絡んでいると思われる。このような大戦の影響や国とルールとの関わりなどを紐解くことによって、世界のハンドボール界における戦後の国際関係がより見えてくるだろう。

## 注

- (注1) こうした事情は明治大学においても同様であった。1938年の第1回東京都学生リーグには、「バスケット部」が出場したという記述がある<sup>4)</sup>。
- (注2) 当時の西ドイツとルーマニアは世界の強豪であり、西ドイツ（58年と61年は東西ドイツの合同チーム）は1954年に開催された世界選手権大会において準優勝、1958年大会で3位、1961年と1964年大会で4位を、ルーマニアは1961年と1964年の大会で優勝を飾っている。

## 引用文献

- 1) 稲門ハンドボール倶楽部（1995）「早稲田大学ハンドボール部 五十年史」
- 2) 三田ハンドボール倶楽部（1987）「慶應義塾体育会ハンドボール部 50年の歩み」
- 3) 立教大学体育会ハンドボール部OB・OG会（2006）「立教大学体育会ハンドボール部史 球友の里 創部60周年記念号」
- 4) 駿河台ハンドボールクラブ（1992）「明治大学体育会ハンドボール部 創立50周年記念」